

保育者の専門性向上の検討 —新設保育園に転職した保育者の語りの分析から—

山川 ひとみ・藤崎 春代

問題

近年、少子化、核家族化などによる子どもを取り巻く環境の急激な変化に伴い（幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議，2002）、保育の質や保育者の専門性や力量の向上が求められてきており（鯨岡，2000；上田，2003）、保育者研究においても専門性向上が注目されている（山川，2009a）。そして、保育の実践や質、専門性の向上とふりかえりや省察とは密接な関係があると考えられている（杉村・朴・若林，2007）。

木全（2009）は、Schön（2001）の実践の認識論である「複雑であいまいで不安定で多様」という特徴が保育にも当てはまるとし、「複雑であいまいで不安定で多様」な保育とそこで暗黙知となっている枠組みを言語化して、保育者自身が認識の「枠組み」をふりかえることの重要性を指摘した。保育の言語化によるふりかえりの機会には、保育記録や保育カンファレンスなどがあるが、その目的は具体的な保育方針を立てることが中心であり、共通する特徴は、検討される対象が主に保育という点だろう。一方、保育者自身の経験全体をふりかえりの対象としたい場合には、何をどのように語るかが重要となってくる。やまだ（2000）は、「物語」を「二つ以上の事象をむすびつけて筋立てる行為」と定義し、時間的秩序や調和的秩序よりも本質的に重要なのは、「むすび」方によって、意味が変容したり、新しい意味が生まれたりすることと指摘する（やまだ，2006）。このように、特定の保育場面に注目するのではなく、多くの経験の中からの出来事を選び、それらをどのように意味づけるかに注目することは、特定の保育場面をふりかえるのとは異なった専門性向上のプロセスが検討できると考えられる。例えば、専門性向上における転職についての教師の語りの研究では、11名の経験豊かな教師が生活科導入の際に、それぞれどのような意味を持って取り入れ、全般的な専門性の向上につなげていったかについての検討が行われている（岸野・無藤，2006）。ここで、

新教科の導入という転職でどのような意味づけをし、語るかを検討することは、専門性向上と密接な関係があると考えられるが、保育者においても、気になる子への保育や、転職などが専門性向上の契機と考えられるだろう。そこで、本稿においても、大きな転職にいる保育者の語りから保育者のふりかえりを検討する。

保育実践を語りでふりかえる例には、山川（2008，2009b）がある。山川（2008，2009b）は、解釈学的現象学的分析（Interpretative Phenomenology Analysis 以下、IPA とする：方法にて詳述）を援用して、ベテランと新人の気になる子への保育実践についての語りを分析した結果、提供する【支援】、周囲から提供を受ける【サポート】、どのように保育をしていくかについて考える【思考】の3つのマスターテーマが両者に共通して出現した。それに対して異なった点は、【思考】において、ベテランでは《経験》と《理解》の2つの群が出現したが、新人には群が出現しかなかった。ここから、新人は具体的なエピソードは多く語るが、それぞれの情報を統合して語ることがまだ難しいことが示唆された。しかし、その後の継続的なインタビューにより、新人2年目には【思考】においてベテランと同様に《経験》と《理解》の2つ群が出現し、保育を客観的にまとまりをもって捉えることが可能になったことが示唆され、【思考】はふりかえりにとって大きな柱の一つと考えられることが示唆された（山川，2009b）。

山川（2008，2009b）では、ある特定の保育実践についての語りを分析したために、支援とサポートが語りの中心となったと考えられるが、語りの対象が保育者の保育経験全体となった場合には、マスターテーマが変わる可能性や、【思考】に出現する群が増える可能性がある。そのため、本稿では、勤務していた保育園の園長の退職に伴い自らの意志で退職し、新しい保育園に変わるだけでなく、新たに役職（主任）に就いて、保育園立ち上げに参加した保育者に注目することにする。このような状況下では、これまでの自身の保育経

験全体をふりかえることがより必要な状況といえ、何をどのように意味づけして語るかに注目することにより、保育者自身が経験全体をどのようにふりかえるかに関する一考察が得られると考える。

目的

大きな転機の渦中にある保育者は、何をどのように意味づけするかの特徴を明らかにする。検討に際しては、気になる子どもの保育という特定の保育実践についての語りを分析した山川（2008, 2009b）と比較することとする。

方法

協力者と勤務園の概要 Z先生：40代、保育者経験15年目。短大卒業後、私立X保育所に7年間勤務後、子育てのため退職し、復職後5年間育児相談や一時預かり、サマーセミナーなどを担当。その後私立V保育所立ち上げのため主任として勤務。勤務園の開園時の園児数は、0～4歳児が51名、職員は、保育士15名（園長1名含む）とその他3名。職員は開園前の200X年1月より、月2回のペースで研修を行い、開園後は全職員出席の会議を月に1回、4時間程度実施。

調査時期・時間 200X年8月、面接時間は69分。

質問内容 面接に先立ち、V保育所の保育士全員に、研究目的や概要、倫理的配慮、なぜ先生方への調査依頼かを説明する依頼文書と一緒に調査協力の可否と、新設園に転職した保育者がどのようにこれまでの保育経験全体をふりかえるかの傾向を知るため①転職の動機、②V保育園への期待、③転職までの準備、④開園までの不安、⑤開園後保育の中で大切にしたこと、⑥開園後の悩み、⑦転職したことによる変化について保育士に質問紙で回答を求め、面接調査ではZ先生一人にそれらを踏まえて半構造化面接で質問をした。

文字化 語りはICレコーダーに録音、得られたデータは、25,466字であった。

分析 IPAを援用し、以下の手順で分析した。①ノートの作成：テキストに応じて、記録したいと思った最初の考えや観察を反映した、幅広い、焦点化していないノートを作成する。連想、問い、要約文、言語使用に関するコメント、欠けているもの、記述的ラベルを記入する。②〈テ

マ〉の特定とラベル付け：それぞれのセクションを特徴づけるテーマを特定し、ラベルづけを行う。テーマのタイトルは概念的で、テキストが表象しているものの本質的な性質について何かを捉えたものにする。③テーマの階層化と《群》の作成：前段階で定義されたテーマをリスト化し、相互に関連付けて考える。意味や関係を共有する概念の自然な群になるテーマもあれば、相互の階層的関係によって特徴づけられるテーマもある。この段階で特定されるテーマのまとまりは、オリジナルデータと関連した意味を持つことが大事とされる。つまり、研究者は構造化しようとするテーマのリストと、最初にテーマを生み出したテキストの間を行きつ戻りつする必要がある。④要約表の作成：それぞれのテーマを表現する引用とともに、構造化されたテーマを要約した表を作成する。要約表は、研究している現象に関する協力者の経験の質について把握しているテーマのみを含むものとする。そのため、第二段階で生成したテーマの中には除外されるものもある（テキストをよくあらわしていないテーマやその現象にとって周辺的なテーマがここで除外される）。⑤【マスターテーマ】の特定：各協力者の要約表を作成したのち、これらの要約表を統合して、協力者グループの経験を全体的に反映する包括的なマスターテーマを作る（Willing, 2003）。本稿も、この原則に従うが、保育者として体験してきた物語が複数出てくると考えられ、マスターテーマの上位概念を設定する必要があったため、それを物語とした。

結果と考察

Z先生は、複数の物語をふりかえったが、そのうち5個が保育経験全体をふりかえる語りとして妥当と考えられた。その全体像を表1に示す。

全体像としては、周囲に提供する【実践】、どのように出来事を捉えるかなどを考える【思考】、周囲から提供を受ける【サポート】の3つのマスターテーマが共通して出現した。さらに、サポートは、提供を受けているものを左矢印（←）、提供をしているものを右矢印（→）、相互に提供し合っているものを両側への矢印（←→）と記すこととした。山川（2009b）では、【支援】、【思考】、【サポート】の3つのマスターテーマが出現したが、これは、語りの対象が気になる子であったため

Table 1 物語一覧表

物語 No.	物語名	実践	思考		サポート
1	理想と感じた保育観	《一時預かりに来ていた子》 《未就園児》	《自己評価》 《他者評価》 《比較対象》 《自己確認》	← ←	《前園の保護者》
2	保育観が異なる保育者集団の中で の特別な配慮が必要な子への保育	《特別な配慮が必要な子》	《比較対象》 《自己評価》 《他者評価＋自己評価》	←	《特別な配慮が必要な子の保護者》 (保育者集団からのサポートはなし)
3	転職を機に保育園内外から得たサ ポート		《比較対象》	← ← ← ← ← ← ← ← ← ←	《ある保育者1》 《ある保育者2》 《ある保育者3》 《現園の保育者集団》 《研修会》 《研修で見学に行った園の主任の先 生》 《家族》 《見学者》
4	現園長による今までになかった提案		《比較対象》 《自己評価》 《ふりかえりの準備性》	← ← ← ← ← ←	《現園の保育者集団》 《現園の保育者集団》 《現園の保育者集団》 《現園長》 《現園長》 《現園長》
5	保育への新たな気づきとやりがい		《比較対象》 《自己評価》 《自己確認》	← ← ←	

に、【支援】になったと考えられ、語りの対象が保育経験全体では、【実践】という命名がより適切と考えられたために、マスターテーマの名称を変更した。以下、全体的傾向として、山川（2008, 2009b）と比較してマスターテーマごとに群レベルから論じ、その後、大きな転機の渦中にある保育者の特徴を示す語りが特にみられた物語2、物語3、物語5について詳細に論じる。

1. マスターテーマのレベルの特徴

(1) 【実践】

《一時預かりに来ていた子》、《未就園児》、《特別な配慮が必要な子》の合計3つの群のみが出現した。山川（2009b）では、ベテランと新人に共通して《気になる子》、《気になる子の保護者》の2つの群が出現し、ベテランのみに《クラス全体》、《育ち合い》、《前クラスメート》の合計5つの群が出現しているため、比較すると出現した群の数が少ないといえる。これは、山川（2009b）が、気になる子への保育という特定の保育実践への語りだったために、支援の対象がより具体的に語られたと考えられる。一方、今回は、保育経験全体をふりかえるよう求めたので、具体的な保育実践よりは、【思考】に関する語りが多くなると考えられる。

(2) 【思考】

山川（2009b）では、ベテランと新人に共通して《経験》と《理解》の2つの群が出現したのに対し、《自己評価》、《他者評価》、《比較対象》、《自己確認》、《他者評価+自己評価》、《ふりかえりの準備性》の6つと出現する数が増え、全く異なった群が出現した。《自己評価》は、自分の保育を客観的に評価する語り、《他者評価》は、他者による自分の保育への評価に関する語り、《比較対象》は、自分以外の保育者や前園の保育と現園の保育とを比較する内容の語り、自分の保育観との違いやこれから先の進むべき方向性を探るような語りであった。《自己確認》では在園児などの他者を指標として自分がやっていることの意味を確認していた。《他者評価+自己評価》では、他者評価を受けた後に、さらに自分なりの評価を加えて語り、《ふりかえりの準備性》では、保育実践を発信したいとする現園長の影響を受け、「そのお手伝いができれば」と自らも発信を意識した内容で、ふりかえりの準備性が整っていたと

考えられる。

また、《比較対象》は5つの物語すべてに出現した。これは、転職だけでなく、転職した先が保育方針などが未確立で、方針などを一緒に生み出していかねばならないだけでなく、職員全員も不安を抱えてもいる状況だったために、多くの側面から自分の保育観を比較し、自分の保育観を再位置づけする機会が多かったと考えられる。

(3) 【サポート】

群の全てがサポート源にあたるものであり、《前園の保護者》、《特別な配慮が必要な子の保護者》、特定の保育者を示す《ある保育者1～3》、《現園の保育者集団》、《研修会》、《研修で見学に行った園の主任の先生》、《家族》、《見学者》の合計11個の群が出現した。山川（2009b）でベテランと新人が共通して得ていた《他クラス担任・フリー》や《学年の先生》は、《現園の保育者集団》にあたる考えられ、《学年会》、《職員会》、《研究会》は《研修会》にあたる考えられる。また、ベテランが活用していたサポート源の《園長》もZ先生の語りでも群として出現し（《現園長》）、新人が活用していた特定の保育者（《ある先生》）もZ先生は3人の特定の保育者をサポート源と語っていた。さらに、ベテランが園外に求めたのは《他機関・専門家》のみであったが、Z先生の語りにはなく、新人がサポートを得た《友達》のように、園外の《家族》や《研修で見学に行った園の主任の先生》からもサポートを得ていた。

2. 物語ごとの分析

2-1 物語2：保育観が異なる保育者集団での特別な配慮が必要な子への保育

全体像 【実践】では、《特別な配慮が必要な子》の群が出現した。【思考】では、《比較対象》、《自己評価》、《他者評価+自己評価》の群が出現し、《比較対象》の中には、〈前園の前園長〉、〈現園長〉、〈前園の保育者集団〉のテーマが出現した。【サポート】には《特別な配慮が必要な子の保護者》が群として出現し、テーマとして〈役割感謝〉のサポート種が出現した。

【実践】 前園の前園長に特別な配慮が必要な子の音楽会の出場を止められたが「別にギョギョだっていい（筆者補足：正しい音が出ていなくてもいい）から、出場させたい」と訴えたことや身体的な疾患のある子どもにもプールを経験させたい

という思いから、本来保育者がプールに入ることはなく、「(筆者補足：他の)先生との兼ね合いってあるじゃないですか。私が入ってしまえば、来年この子を担当する先生も入らなくちゃ行けなくなるなって思ったんだけども(中略)で、やっぱり周りの先生からはありましたよね。『私たちだってそうしなきゃいけないんだよね』みたいな」と他の保育者と自分の保育観が異なり、自分の行動が肯定的に受け入れられなかったが、「それよりも何よりもこの子を入れてあげたいって思っちゃって」とプールに入ったことが語られた。

山川(2009b)では、ベテランと新人に共通して《気になる子》、《気になる子の保護者》の2つの群が出現し、ベテランのみに《クラス全体》、《育ち合い》、《前クラスメート》の合計5つの群が出現したために、【実践】で出現した群の数が少ないといえる。これは、山川(2009b)では、多くの支援の対象への支援が具体的に語られたのに対し、保育経験全体をふりかえるよう求めたために、特に他の保育者との保育観の違いを実感した特別な配慮を必要とする子への保育実践について語られたために、出現する群が減少したと考えられる。

【思考】前述のように、山川(2009b)では、《経験》、《理解》の2つの群のみが出現したのに対し、今回は《比較対象》、《自己評価》、《他者評価+自己評価》の3つの群が出現し、テーマは《比較対象》に〈前園の前園長〉、〈前園の保育者集団〉が出現した。具体的には、音楽会の話の中では、《比較対象》で、特別な配慮が必要な子を音楽会に出場させるか否かについて、〈前園の前園長〉と意見が異なり、前園の前園長が提案した、出場させないことも、音を出さないように工夫をすることもできないと訴えたと言った。前園長の意見に従わず出場させた行動に対して、保育者集団の一員として、「当時はちょっとまずかったかなって思った」と《自己評価》をするが、その保護者から、卒園時に「本当にありがとうございましたって涙してくれて」と《他者評価》をされて、「あー、やっぱり間違いじゃなかったんだって思って」と他者評価を通した自己評価(《他者評価+自己評価》)に至り、ふりかえった経緯を語った。ここから、前園の前園長との意見の対立の結果、迷いも生じたが、自分の保育観に従い、最終的には特別な配慮が必要な子の保護者の評価(他者評価)を通して自分を評価していたと考えられる。その他、特

別な配慮が必要な子をプールに入れるには、保育者が一人プールに入らなければならず、そうすることで「周りの先生からはありましたよね。『私たちだってそうしなきゃいけないんだよね』みたいな」(《比較対象》の〈前園の保育者集団〉)と周囲の歓迎しない雰囲気を感じていた。しかし、「この子を入れてあげたいって思っちゃって」とプールに入ったことを語った。そして「そんなことの繰り返しで。私、浮いてたんだろうなって思うんですよ」と《自己評価》していた。ここから、前園では前園長だけでなく保育者集団とも保育観の違いを感じており、その集団からは自分が違う保育観を持った存在と認識していたと言える。さらに、特別な配慮が必要な子の保護者が卒園児に泣きながら感謝をしたことにふれ、それを情緒のサポートとするだけでなく、その他者評価を通して「間違っていなかった」と改めて自己評価をしていた(《自己評価+他者評価》)。

【サポート】《特別な配慮が必要な子の保護者》の群でテーマに〈役割感謝〉のサポート種が出現した。山川(2008)では、テーマにベテランにも新人にも〈役割感謝〉のサポート種が出現しなかったことを踏まえると、他の保育者から賛同を得られない中で自分の保育観に基づいて実践したために迷いも多くあったが、保護者からの〈役割感謝〉によって、自信を持って評価できるようになったと考えられる。さらに、この保護者の役割感謝から「この仕事つづけていきたいって思ったし(中略)大きい保育園の中で少しずつでも変えていきたいって思った」と語り、保育者としての自らの核に気づけたと考えられる。

2-2 物語3：転職を機に得た保育園内外からのサポート

全体像 【実践】では、群が出現しなかった。【思考】では、《比較対象》の群が出現し〈研修で見学に行った園の保育者集団〉のテーマが出現した。【サポート】では、《ある保育者1》、《ある保育者2》、《ある保育者3》、《現園の保育者集団》、《研修会》、《研修で見学に行った園の主任の先生》、《家族》、《見学者》の群が出現した。

【思考】《比較対象》に、〈研修で見学に行った園の主任の先生〉のテーマが出現し、開園当初の混乱した状況の中で、どの程度現場にフォローに入るかを悩んだ際に、「『もっと保育に入ってい

んじゃない?』と言われてそれで園長先生に言えたんですね」と語られたことから、自分の考えが他の保育者と比較して妥当かどうかの判断材料となったと言えるだろう。

【サポート】 山川 (2009b) でベテランと新人が共通して得ていた群は《他クラス担任・フリー》や《学年の先生》は《現園の保育者集団》にあたり、《学年会》、《職員会》、《研究会》は《研修会》にあたりと考えられる。また、ベテランが活用していたサポート源の《園長》も Z 先生の語りでも群として出現し(《現園長》)、新人が活用していた特定の保育者(《ある先生》)も Z 先生は 3 人特定の保育者を出してサポートを得たと語っていた。さらに、ベテランが園外に求めたサポートは《他機関・専門家》であったが、Z 先生にはみられず、新人がサポートを得た《友達》のように、園外の《家族》や《研修で見学に行った園の主任の先生》、《見学者》からサポートを得ていた。

Z 先生の語りでは、《ある保育者 1》と《ある保育者 2》と《ある保育者 3》からは、〈情緒〉と〈具体的援助〉のサポートを得ていた。これは、研修会で、新人は新人なりの、経験者は経験者なりの発表があり、「ほんとにすごいです」と〈情緒〉のサポートを得て、《ある保育者 3》の介護経験を通した個人的な学びを保育の視点から捉え直す発表を聞いて「幅が広がった」と〈具体的援助〉のサポートを得て、さらに「涙が出るくらいの感動」と〈情緒〉のサポートを得たと語った。そして、《現園の保育者集団》からは、「(筆者補足：研修会を通して) 職員同士の結びつきも強くなり」などの〈情緒〉のサポートを得たと語られた。「人間関係がぎくしゃくしてしまえば、いろんな所に影響するのも見えて分かっているし」という語りからも、それまでの経験から保育者集団からの情緒的サポートを Z 先生が重視していたと考えられる。《研修で見学に行った園の主任の先生》からは、「あの先生に相談するしかないと思って、半分愚痴もあったかもしれないんだけど」とまず〈情緒〉のサポートを得ていたことを語り、加えて『「もっと保育に入っているんじゃない?』って言われて」と〈具体的援助〉のサポートも得ていた。保育園の内情をよく分かっている〈研修で見学に行った園の主任の先生〉に自分からサポートを求めたことから、開園当初の Z 先生にとって重要なサポート源であったといえる。また、《家

族》からは、園児のためにドジョウを捕まえてくれるなどの〈具体的援助〉や、保育士という職業に対する〈役割感謝〉、Z 先生の代わりに積極的に家事をやり休むように言う〈情緒〉のサポートを得ていた。さらに、《見学者》からは、保育園と職員に対して肯定的評価を受ける〈役割感謝〉のサポートを得ていた。

山川 (2008) とテーマのレベルからも比較すると、ベテランのテーマはサポート種の〈情報〉が主に出現し、新人のテーマには〈情緒〉や〈相談〉などのテーマが出現したのに対して、Z 先生も〈情緒〉などのテーマが出現している。これは、転職、新設園の立ち上げ、昇進という混乱した状況の中では、必要なサポートが新人により近いものであったと考えられ、それだけ多くのサポート源やサポート種に支えられて、日々を乗り切っていたと考えられる。

2-3 物語 5：保育への新たな気づきとやりがい

全体像 【思考】のみ群とテーマが出現した。これも、転職を契機に改めてふりかえり、気づいたことや、やりがいを感じているという内容の語りだったために、実践やサポートに関する語りはなかったと考えられ、群は《比較対象》、《自己評価》、《自己確認》の群が出現した。《比較対象》には〈前園の保育〉のテーマが、《自己確認》には〈指標：子どもの発言〉、〈指標：子どもの楽しそうな顔〉、〈指標：家族の言葉〉、〈指標：見学者の言葉「子どもの目が違う」〉のテーマがそれぞれ出現した。

【思考】 《比較対象》では、安全面への考慮から、夕方からビデオしか見せなかった〈前園の保育〉を「こんなことしていいのかなって思ってた」と疑問があったことを語った一方、夕方も外に出て遊ぶ〈現園の保育〉を「遊ぶ・遊ぶって感じ」と保育の違いを語っていた。それに加えて、「自分の子どもを入れたくなる保育園です」、「やっぱりテレビは違っていた」と現園と前園の保育を《自己評価》をして語っていた。さらに、《自己確認》では、保護者からの「子どもを休ませたら、なんで連れて行ってくれないのって怒られた」という話などの子どもの発言や姿を指標に確認して語っていた。また、見学者に「子どもの目が違う」と言われたことを挙げ、「これができたんだ(筆者補足：見学者にさえそう言ってもらえるような保

育ができたんだ)」と語っていた。ここから、自分の理想の保育を実践した結果、在園児以外からも肯定的な評価を受け、自分がやってきたことを保育者の専門性に絡めて確認していると考えられる。そのほかの指標としては、テーマとして〈家族の言動〉が出現し、前園にも何回も来た夫が現園に関して「いい保育園。なれるなら保育士になりたい」と初めて言ったことや、転職を迷うZ先生に子どもがお小遣いから履歴書を買って来て転職を勧めたことは、あえて新設園の主任というやりがいと困難が多そうな職場を選択したZ先生にとって大きな意味があったといえるだろう。この家族の言動を指標とすることは、保育者の専門性と絡めた自己確認という狭い意味での自己確認ではなく、仕事をしていることの人生における意味を自己確認しているといえ、今後検討すべきより広い視野の一つと言えるだろう。また、家族からの言動を〈情緒〉のサポートとしてだけでなく、自己確認の指標として活かすような語りも、〈情緒〉のサポートを多く得ていた新人の語りでは見られなかったことから、保育経験の全体というより広い対象についてふりかえったからこそ生じる語りだと考えられる。

全体的考察

気になる子への保育実践という特定の対象についての回答を求めた山川(2008, 2009b)と比較すると、【支援】と【実践】、そして【サポート】について語られたもの少なく、【思考】で多くの群が出現した。山川(2009b)では、【思考】において《経験》と《理解》の2つが出現したが、これは語りの対象が気になる子への保育実践だったのに対し、その対象が保育経験の全体であったために、さまざまな観点からのふりかえりが生じたためと考えられる。また、群の《比較対象》が全ての物語に出現した。これは、保育園の立ち上げに主任として携わるという状況下では、できあがっている保育園への転職と異なり、保育方針を自ら生み出さねばならないことや、他の保育者と自分の保育観の違いを比較しながら一つ一つのことに対応をしていたと考えられる。さらに、《自己確認》では、子どもの言動などを指標として、保育実践の確認を行っていた。これは、子どもの言動などをエビデンスとしてそれらに基づいて自

分の保育実践を確認していたといえる。

また、【サポート】については、山川(2008)では、ベテランにはみられず新人にのみ出現した園外からもサポートを得たり、〈情緒〉のサポートを園内外から得ており、新人に近いサポートの提供を受けていたといえる。ここから、やりがいと多忙さを極める保育園の立ち上げは、多くのサポートが必要な危機的な状況といえ、経験年数はベテランの域であったとしても多くのサポート源に支えられて日々を乗り切っていた様子がかがえる。

さらに、【実践】に関する語りが少なかったが、その要因としては、今後の方向を探るために自らの保育観を考えることや、サポート体制の構築に時間をより割いていたことが挙げられる。

最後に、【思考】の《自己確認》において、〈家族の言動〉を指標とし、保育者の専門性と絡めた狭い意味だけでなく、仕事をしていることの人生における意味というより広い意味で自己確認するような語りが見られたのは、山川(2009b)には見られなかった語りであり、今後検討すべきより広い視野の一つと考えられる。

文献

- 木全晃子(2009). 実践者による保育カンファレンスの再考：保育カンファレンスの位置づけと共に深まる実践者の省察 人間文化創成科学論叢, 11, 277-287.
- 岸野麻衣・無藤隆(2006). 教師としての専門性の向上における転機：生活科の導入にかかわった教師による体験の意味づけ 発達心理学研究, 17, 207-218
- 鯨岡 峻(2000). 保育者の専門性とはなにか 発達, 83, 16-21.
- Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: how professionals think in action*. New York: Basic Books. (シヨーン, D. 佐藤学・秋田喜代美(訳)(2001). ゆみる出版)
- 杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃(2007). 保育者省察尺度に関する探索的研究(1) —保育現場における反省的实践— 幼年教育研究年報, 29, 5-12.
- 上田淑子(2003). 保育者の力量観の研究—幼稚園と保育所の保育者の比較検討から— 保育学研究, 41, 24-31

- Willing, C. (2003). *Introducing Qualitative Research in Psychology : Adventures in Theory and Method*. Buckingham ; Philadelphia : Open University Press. (ウィリッグ, C. (2003). 上淵寿・大家まゆみ・小松至共訳. 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて— 培風館)
- やまだようこ (編) (2000). 人生を物語る—生成のライフヒストリー— ミネルヴァ書房
- やまだようこ (2006). 人生を記録すること・物語ること (<特集>体験の記録・利用とその意義) システム/制御/情報: システム制御情報学会誌, **50**, 33-37
- 山川ひとみ (2008) 気になる子を保育するベテラン保育者と新人保育者が利用する幼稚園内外のサポート体制の比較検討—幼稚園での半構造化面接から— 昭和女子大学大学院生活機構研究科修士論文 (未公開).
- 山川ひとみ (2009a). 保育者に求められる専門性に関する一考察—保育者には何が期待されてきたか— 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, **18**, 93-104.
- 山川ひとみ (2009b). 新人保育者の1年目から2年目への専門性向上の検討: 幼稚園での半構造化面接から 保育学研究, **47**, 31-41.
- 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議 (2002). 幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために— 文部科学省 2002年6月26日 (<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm> (2009年1月20日))

謝 辞

ご多忙の中、調査にご協力くださいましたZ先生には厚く御礼申し上げます。

(やまかわ ひとみ 昭和女子大学大学院生活機構研究科生)
(ふじさき はるよ 昭和女子大学大学院生活機構研究科)